「おふでさき」の標石的用法（16）

動詞について ①

天理大学非常勤講師
深谷　耕治　*Koji Fukaya*

本連載では、これまで「ことわり」や「うらみ」、あるいは「そうじ」などの言葉に着目して、その語が示す意味についてみてきた。これまではある特定の主題を探求してきたので、それを示す名詞（例えば「ことわり」）を中心に据えてきたが、今回から少し視点を変えて、特定の一語ではなく、動詞という役割を担う言葉群に焦点を当てて考えていきたい。

「おふでさき」の動詞を体系的に取り扱っている研究としては、森田義興の「『おふでさき』の国語学的研究（三）―語彙・語法その一―」（『日本文化』第十五号、1938 年。以下、「国語学的研究」）が挙げられる。そこでは主に動詞の活用の仕方が示されており、「おふでさき」に登場する動詞が網羅的に示されていることに加えて、連用形より転じて名詞となっているものが多いことや、連用形に発生する音便として促音便がないといった特徴が挙げられており、さらには「いがめる」や「いづむ」などの方言的な動詞についても多数言及されている。本連載は、こうした森田の国語学的な知見を参照しながら、もう一歩踏み込んで動詞の意味論・語用論を探求していく。とはいえ、「おふでさき」に登場する動詞は 200 語以上あり、一度にその全てを考察することは困難である。そこで、ひとまず一定の特徴を持つ動詞に絞って論を進めていきたい。

動詞には、それ自身の動作・作用を示すものと、他への働きかけを表すものがある。いわゆる自動詞と他動詞である。日本語では、そうした特徴を持つ動詞は、たとえば、「上がる／上げる」や「折れる／折る」のように同じ語幹を持ちながらその対比を示しているものが多い（有対自他動詞とも呼ばれる）。しかし、中には「開く」や「増す」のように自他同形の動詞もあり、また、「縮む」（自）「縮まる」（自）「縮める」（他）のように自動詞が二つあったり、あるいは「休まる」（自）「休める」（他）「休む」（他）のように他動詞が二つあったりする場合もある。そのようにして動作・作用をめぐる自他の示し方は色々とあって単純な二項対立で捉えられるわけではないが、「おふでさき」では、以下の動詞は差し当たってそうした自他の区別を示しているといえよう。

・あらわれる／あらわす
・いさむ／いさめる
・いりこむ（いる）／いれる
・うまれる／うまする
・おさまる／おさめる
・さだまる／さだめる
・しれる／しる／しらす
・すむ／すます
・たすかる／たすける
・つまる／つむ／つめる
・でる／だす
・とまる／とめる
・なおる／なおす
・なやむ／なやめる
・のく／のける
・はじまる／はじめる
・まじる／まぜる
・みえる／みる／みせる
・やどる／やどしこむ（やどす）
・よる／よせる
・わかる／わける

本連載では、しばらくは、これらの動詞のいくつかについて考察を進めていく。ただし、先にも述べたように、動詞の自他の区別は単純な二項対立ではなく、曖昧な点も多い。そのため、こうした区別は、「おふでさき」理解へのあくまで一つの手がかりであり、問われるべきことは、こうした動詞の自他の区別が何を意味し、そこにおける「自」や「他」が何を示し、それがどのような関係にあるのか、そして、それらのことがその動詞を中心とした「おふでさき」の各歌の意味解釈にとってどのような役割を持つのかといったことである。

和歌形式をとる「おふでさき」では、多くの場合、動詞は助詞によってマークされることなく他の語句と意味の上から関連づけて用いられている。そのため、一つの語にいくつもの意味を重ねることができ、幅広い解釈が可能となっている。他方で、動詞に対して助詞が付されている場合も少なからずあり、拡散しがちな意味内容に限定をもたらしてもいる。とりわけ「が」や「を」などの格助詞は、それが付されている名詞（体言）と動詞（用言）との関係を比較的強い力で規定しており、動詞を中心とする各歌の意味内容の理解において欠かすことのできない働きを担っている。こうしたことから、動詞に着目した読み方をする場合、その理解の第一の手がかりとなるのは、助詞の働きであろう。そこで順序としては、まず助詞が明示されている歌からはじめて、助詞によって指定されている意味を読み解き、次に、そうしたケースを参照しながら、助詞のない場合を考察していくことが妥当であると考えられる。こうした方法で、次回から、まず「あらわれる／あらわす」について見ていきたい。

なお、「おふでさき」に関する代表的な先行研究として、上記の「国語学的研究」に加えて、主に以下のものを挙げ、その他のものに関してはその都度挙げていくこととしたい。『おふでさき概説』（中山正善、以下『概説』）、『おふでさきに現れた親心』（同、以下『親心』）、『おふでさき講義』（上田嘉成、以下『講義』）、『おふでさき通訳』（芹沢茂、以下『通訳』）、『おふでさき拝読入門』（矢持辰三、以下『拝読』）。また、「おふでさき」の「注釈」は『注釈』、『みちのだい』における上田嘉太郎の連載は『勉強会』、『みちのとも』における安井幹夫の連載「おふでさきを学習する」は『学習』とそれぞれ略記する。

また、自動詞と他動詞は、受身や使役などを説明する態やヴォイスといった文法的範疇にも関連する。そこでは話し手（書き手）の視点の違いが見られ、たとえば同じ動作でも動作主の視点から描けば能動態、その動作が及ぶ対象の側から描けば受動態（受身）となる。そして、自動詞は後者の視点を示し、他動詞は前者の視点を示す。「おふでさき」における自他動詞はこうした視点の違いという観点からも特徴づけられ得るであろう。